

日本文学に於ける エンディングの諸問題

丸山 正人

一、はじめに

『文学』（岩波書店 第四巻第四号 一九九三 秋）の特集「未完の小説」という座談会（十川信介・石原千秋・久保田淳・長島弘明の四氏）の初めに十川信介は問題提起として、

未完の問題については、以前に国文学研究資料館で、スタンフォードの上田さんを中心に、『終わりの美学』と言う共同研究がありまして、そこで強調されているのは、日本文学における終結感の弱さと言うことです。オープン エンディングという言葉で説明されていますが、何か完全に終わったような感じはしないけれども、テクストは終わっている。それが日本の近代小説の特徴だと言うことです。…中略…

こういう研究が少ないこと自体が、終わりの感覚が弱い、私達のものである。文学の特質を示しているようにも思われますが、…（十川）

ここで、日本文学におけるエンディングについて考察をしてみたい。文学において完結、終結ということはどのような概念を持っているのだろうか。同じ、特集のなかで、クロード・デュッシュは「未完に関する未完の覚え書」で、『フランス語宝典』を引用して、

「完結する」こと——「始まったあることを自然な、あるいは作爲的な終わりへ導くこと」。さらに、「完結する」ということは、完璧なものにすることであり、完成の暁に訪れる高場に達することである」

というように概念規定をしている。

しかし、日本文学が「終結感の弱い」、「終わりの感覚が弱い」ということで、日本文学全体を律して良いものだろうか。

二、日本文学のエンディングの諸相

1 完全に結末をつける文学

『落語』や『推理小説』をこの小論で問題にしている文学の分野に於けるに問題が無いわけではないが、完結を問題にする上で触れてみる。

『落語』は、「落ち」によって噺は完結される。例えば、『寿限無』では彼が近所の子供の頭を殴って瘤をつくる。子供がそれを訴えている間に、「あんまり名前が長いから、瘤がひっこんじゃった」という「落ち」でこの噺は完結する。噺として完結されているため乱暴者の寿限無の今後の成長は問題にならない。

『推理小説』は犯人の逮捕によって事件は解決し、推理小説は結末が付けられる。小説によっては、その事件の背景となるような社会問題や政治問題はそのまま残されることがある。しかし、それを描くのは推理小説の目的ではない。小説としてはあくまで完結されている。

『能』亡霊が消えてゆくことでその能は完結されるものが多い。劇的構成が強い四番目物（現在能）にしても、

『船弁慶』では、弁慶の祈りによって「……なほ怨霊は、慕ひ来るを、

追っ払い祈り退け、また引く潮に、揺られ流れ、また引く潮に、揺られ流れて、跡白波とぞ、なりにけり」と完結する。

同様に、『安宅』では、富樫ら関守らに留められたが、最終的に「さらばよとて、笈をお取り、肩に打ち掛け、虎の尾を踏み、毒蛇の口を、逃げれたるこちして、陸奥の国へぞ、下りける。」と完結している。ここで、観客は「それからの義経・弁慶一行はどうなったか」と言うような疑問は起こらない。能が完結しているからである。

2 和歌、特に短歌の場合

待つ人も来ぬものゆゑに鶯の鳴きつる枝を折りてけるかな

(古今集 春下)

この歌は「待つ人が来ないので、鶯が楽しく鳴いていた梅の枝を折ってしまった」という女の心情を詠んでいる。形は「折りてけるかな」という述部をもって完結させていて、形も内容も完結させたものになっている。しかし、

たまゆらの露も涙もとどまらずなき人恋ふる宿の秋風

(新古今集 哀傷)

の和歌は、『秋風』で終結させている。述部を持たない「体言止」の和歌である。形式としては、「秋風」がどうした、「秋風」をどう感じたかということは一切表現されていない。形式は未完である。それでいて、作者の心情は余情として享受者に十分に伝えられる。その意味でこの和歌は完結されたことになる。

和歌においては、形式上の完結さを求めることには余り意識されないといえる。同様の完結の仕方では「連体止」もあるが、享受のされ方は

「体言止」と同様である。和歌では、作者は必ずしも表現上の完結さについては問題視しないで、いかに主意、主情を表現するかに心を用いたのではない。そして、享受者は作者の注意、主情を受け止めることに意を用いた。

3 連歌・連句の場合

連歌・連句等は、文字通りエンドレスという文学ではないか。ただ便宜上百句、三十六句なりで一応止めておく。形式として、揚句で完結させるということになっている。

このことは、井原西鶴の『独吟二万三千五百句』の興行にみられるように、矢数俳諧等はいかに多くの句を詠むかということが主眼で、全体の構成とか、結末をどのように完結させるかなどは眼中に無かったのではないか。

連歌・連句は、発句と脇句とで一つの世界(情景や心情など)を作り、次に脇句と第三との間には発句と脇句とで構築した世界とは全く別の世界が構築されることを要求される。さらに、第三は発句とは全然関係のない内容を詠むことを同様に要求される。このようにして一句ずつずらして次の句との間にそれぞれの世界を構築して百句、三十六句なりを詠み続けてゆき、揚句で完結させる。この連続が連歌であり、連句である。ここでは、エンディングは考慮されていないのではないか。

連歌・連句では、花の座、月の座などの定座を指定して全体の変化を求めているが、その全体の内容構成や結末の付け方よりも、前句と付句との間の付合いのほうが重大の問題になっている。

近代の短歌や俳句でも、一首、一句がそれぞれに独立した情景や心情

などを表現していて、完結の仕方は短歌で見たようなことがいえる。連作という作法もあるが、これは連作全体として一つの事柄や事件を詠むのであって、各歌、各句は同一の対象にたいするそれぞれの心情とか情景を詠んでいる。しかし、その連作の最後の一首、一句にエンディングという意識は持たせているのであろうか。

4 物語の場合

「説話物語」などは小さな説話の集成であって、種が尽きるまで幾らでも続けてゆける。そして個々の説話はそれぞれに完結している。発端があり波乱があり結末がある。「今昔物語」では結末の形として、

作者の評語を付けている。しかし、そこには「今昔物語」という「説話物語」の作品全体としてのエンディングという意識は無いといえる。

「源氏物語」では、「夢の浮橋」の巻で終わっているが、完結しているのか、いないのかが問題になっている。それは「竹取物語」は、かぐや姫が月の世界に昇天することで物語は完結している。しかし、「源氏物語」では、入水した浮舟が助けられた後どう生きてゆくのかとか、薫との関係はどうなっていくのかという疑問がわく。だから、「源氏物語」は未完であるという読み方が生まれる。この立場からいえば、第二部で光源氏が亡くなるところで完結していれば文句なしに完結していることになる。しかし、「宿世」ということを考えようとするれば、薫の生い立ちやその行き方を描く必要が生じてくる。従って「宇治十帖」の存在理由がはっきりしてくる。薫や浮舟の存在が必要であっても、彼等の一生を描く必要はないと考えられる。もし、そこで、明確に結末を付けようとして彼等の一生を描けば、光源氏を主人公とした「源氏物語」に一貫

性が欠けることにならないか。こう考えると、「源氏物語」の結末が何か物足りないという感じがするのは、形式的には完結されていないが、物語としては完結していると考えてもよいのではないか。

三、創作する立場Ⅱ作者の立場と詠む立場Ⅱ批評する立場

日本の近代小説に未完の作品が多いという「座談会」の議論は、近代になってヨーロッパの文学や文学観が輸入されてきて日本の文学作品をヨーロッパの文学観で批評しようという立場が生まれてきたからであろう。そこに創作する立場と批評する立場との乖離が生まれてきたと考えられる。

1 創作する立場を考える。

川端康成の「山の音」や「千羽鶴」などは、幾つかの短編小説を集めて「山の音」なり「千羽鶴」なりという作品に仕立てられている。一つの短編が「終わり」となり、纏められた作品の「山の音」なり「千羽鶴」なりには終結感が薄いという批評が生まれる。創作する立場の小説家は、創作するときの作者の意識の根底、むしろ意識しない根底においては連歌や連句を作り、鑑賞する立場や考え方があってはならないだろうか。つまり、短編を書き続けてゆこうとするればどこまでも続けることができるし、止めようと思えばどこでも終わりにすることができる。そこには未完という意識は薄かったのではないか。これは連歌や連句の創作態度であり、享受の態度である。それを、羽島徹哉が「特集」の中の「川端文学に於ける未完の問題」で次のようにいっている。

……そういう未完の作品の集がその年六月、芸術院賞を受けた。「雪国」や「千羽鶴」も全体としては未完でも、部分としてそれ

なりに読める作品を作者が心掛け、またそうした性格の作品を受け入れる素地が日本社会にあった訳である。……。

といている。日本の文学に終結感が薄いというのは、連歌や連句等を作り、鑑賞する立場や考え方でなく、輸入されたヨーロッパの文学や文学観による立場からの考え方なのではないだろうか。

私小説の作家群の作品は、作者自身の身の周辺の雑事や心境を止めどなく取り上げて作品にしている。身の周辺の雑事などが終わらないように小説も次から次へと書き続けられていて、それぞれは未完ではないが完結してるとはいえない。即ち、オープン エンディングである。

現在、特に戦後の文学での「三部作」とか「四部作」とかは、夏目漱石の二つの「三部作」とはかなり異質のものではないだろうか。漱石のものは主人公は違う人物として描かれているが、取り上げているテーマは同じもので貫かれている。

ところが戦後の作家、例えば中村真一郎の「四季」の「四部作」はそれとはかなり異なる。「四季」の「四部作」は、四篇の小説はそれぞれ別のテーマを持って長編小説の一つの章(章というには皆長編であるが)としての位置を与えられて「四季」「四部作」全体としての大きなテーマを構成させる要素として組み込まれている。しかも、この「四部作」は長編小説として完結している。これが川端文学の「雪国」とも「千羽鶴」とも大きく異なる点と考えられる。

戦後の作家の個々の諸作品はそれぞれに完結している。例えば、倉橋由美子にしても辻邦生にしても小説は作品として完結していると考えられる。

2 何故このようなことが可能であったのか。

「文学」の「座談会」では、「近代の小説の場合」と断ってはあがるが、戦後の小説には全く言及していない。これは戦後の小説には問題として考えるべき未完の小説はなかったであろうか。もし、その様な傾向が強いとしたら中村真一郎を含めて戦後の作家達は欧米の文学作法や、文学論、文学評論を深く研究し、自分のものとしていたのではないか。

さらに、戦後の小説作家には連歌や連句を作る座とか、それらを作る側としての意識も技術も持たなかったのではないか。この両者から必然的に小説に完結性を求めていったのではないか。

四、おわりに

日本文学におけるエンディングに「終結感の弱さがある」とか、「終わりの感覚が弱い」というオープン エンディングの傾向が強いといわれているが、それを考える上で以下の諸点を問題点としてあげてみる。

1 日本の古典文学の創作態度と享受の姿勢が近代から現代までに至る小説にどのように影響しているか、また影響していないかを分析し考察しなければならぬ。さらに、『竹取物語』など『源氏物語』以前の物語は完結性が強いのに、以後の物語には弱いとされているが、それはなぜそうなったか、短歌や連歌、連句の創作と享受の意識や態度がそれに影響しているか、いないかを考える必要がある。

2 戦後の小説(現代小説)のエンディングをさらに分析し考察を加えなければならぬ。

3 そのためにも、エンディングの概念規定をしっかりとつける必要がある
はしないか。また、同時に日本文学におけるエンディング研究の方法論
を確立させる必要があるはしないか。

4 享受する側の意識の問題として、「キチンと完結していなくともいい
のだから受け取り方が、昔から日本ではあったわけでしょう」という
「座談会」での久保田発言でいう享受者の意識はどこからきているのか
は前に考察した通りであるが、それでよいのか。改めて考える必要があ
ろう。さらに、このような日本人の文学作品を享受する側の意識は今後
変化するのか、今後もしないのかも考える必要があるろう。

以上は日本文学のエンディングについてかなり粗雑な考察であるが、
考察の結果から問題点をあげて今後の研究課題としたい。